

# 日本と中国における 金魚観賞とその選評基準

Goldfish Appreciation and Breeding Standards in Japan and China

野地恒有

はじめに

- ① 日本金魚の選評基準
- ② 『金魚養玩草』にみる選評基準
- ③ 中国金魚の選評基準

おわりに

## 【論文要旨】

本稿は、金魚観賞における選評基準を題材とした動植物観賞の文化の比較民俗学的研究である。選評基準とは、金魚観賞において、金魚を選定・評価する基準のことである。本稿では、第1に、現代の日本金魚の選評基準として蘭鑄、土佐金、地金の3品種の金魚を取り上げることによってその選評基準と観賞の志向をとらえ、第2に、18世紀の中頃に著された金魚飼育書『金魚養玩草』を用いて江戸時代の金魚の選評基準を検証し、第3に、中国金魚の選評基準との比較を行った。

その結果、日本金魚の選評基準は、1品種に完結した理想形として提示されており、その基準への嵌合という飼育形態がみられた。そして、その観賞の志向は、一定の理想形への深化とまとめられた。『金魚養玩草』からも、ほぼ同様な金魚観賞の志向を見出すことができたが、『金魚養玩草』には、1品種の枠を越えて新品種を評価する態度がみられ、現代における日本金魚と異なる観賞の志向もとらえられた。中国金魚の選評基準は多品種を包括した実体に即した等級分類として提示されており、定形の基準外の品種作出という飼育形態がみられた。そして、その観賞の志向は、多様性への拡大とまとめられた。

金魚の観賞における選評基準は伝承文化を背景としている。金魚飼育とは選評基準に合致した金魚を作り出す技術のことであり、選評基準とは金魚の飼育技術と密接に関係している知識体系のことである。金魚の飼育をはじめ、花卉・草木や盆景・盆栽の栽培などは〈改造された自然〉を対象とする技術であるとともに、〈改造された自然〉の観賞でもある。それは、動植物観賞の文化といえる。〈改造された自然〉を観賞する文化において、日本では定形へ深化し、中国では変形に拡大すると予想される。その志向の差は自然観の質的な相違を表出するものである。

## はじめに——選別と選評——

<sup>(1)</sup> 金魚は観賞することを目的とした魚である。観賞に値する魚（観賞の程度はさまざまであるが）を作り出すために、金魚の産卵・孵化から成魚までの飼育には選別という作業がある。選別とは、成長過程で現れてくる不良形の金魚を取り除く作業のことである。選別には金魚の成長過程を評価する基準が存在する。

選別とは定形の基準に合致しない金魚を淘汰することである。この選別作業において、金魚は、体形、体色、眼球、尾・鰭の形によって選別される。マルモンといわれる体形が丸い金魚の場合、体形が平たく細長いものや片目のものは品種に関係なく取り除かれる。

さらに、品種別に異なる基準が存在する。たとえば、琉金の場合、尾の形からいえば、尾が二つに割れているのがよいとされ、次のようなものは取り除かれる。尾がフナの尾のように一本尾になっているもの、尾が開いておらず閉じた尾が中央で飛び上がっているもの、尾が傾いており左右の開きが異なっているもの、尾が焼けたように切れ切れになっているものなどである。成長段階にしたがって、選別がくり返される。金魚生産者の飼育技術については、別に述べたところである〔野地 2001, 2002〕。

選別を経て成魚となった金魚の観賞にも、選定・評価の基準が存在する。金魚観賞において、成魚を選定・評価してほかの金魚と区別することを、本稿では「選評」ということとする。選別とは金魚の飼育過程において選定・評価することであり、選評とは金魚の観賞において選定・評価することである。選評の基準は伝統的に作り上げられたものであり、その基準は金魚の飼育技術と密接に関係している。

鈴木克美〔1989〕は、金魚や錦鯉の飼育を「魚観賞の文化」ととらえた。ひとまずこの「魚観賞の文化」を借りていけば、本稿は、日本と中国における「魚観賞の文化」の比較民俗学的研究である。金魚の選評基準を題材として、日本と中国の「魚観賞の文化」における質的な相違を明らかにする。

## ①……………日本金魚の選評基準——蘭鑄・土佐金・地金——

日本の金魚は、16世紀のはじめに中国から伝来した。江戸時代の初期、支配者層や富裕層において金魚の飼育という形態が見られるようになった。元禄年間（1688～1703）以降に庶民の間に金魚の愛玩が流行した。文化・文政年間（1804～29）には金魚の品評会が開かれ、金魚の番付が発行されるほどになった。日本の金魚飼育は、江戸時代の初期（17世紀はじめ）に一部の階層に形成され、元禄年間（17世紀の終わり）に庶民の間に普及し、文化・文政年間（19世紀はじめ）に完成した〔松井 1963：103-111, 1972：3-5〕。

日本金魚には次の品種があげられている<sup>(2)</sup>〔松井 1972：22-28〕。

和金（ワキン） 琉金（リュウキン） 鉄尾長（テツオナガ） 山形金魚（ヤマガタキンギョ） コメット（漢字表記されていない） 蘭鑄（ランチュウ） ナンキン（漢字表記されていない） 大

阪蘭鑄(オオサカランチュウ) 和蘭獅子頭(オランダシシガシラ) 日本鼻房(ニホンハナフサ) 地金(ジキン) 出目金(デメキン)〔赤出目金(アカデメキン), 黒出目金(クロデメキン), 三色出目金(サンショクデメキン)〕 頂天眼(チョウテンガン) 土佐金(トサキン) 和唐内(ワトウナイ) 秋錦(シュウキン) 朱文錦(シュブンキン) キャリコ(漢字表記されていない) 東錦(アズマニシキ) 江戸錦(エドニシキ) キャリコ頂天眼(キャリコチョウテンガン) 津軽錦(ツガルニシキ) 弘錦(ヒロニシキ) 金爛子(キンランシ)

以上 26 品種のうち、中国から輸入された品種は和金・琉金・和蘭獅子頭・出目金(赤出目金・黒出目金・三色出目金)・頂天眼の 7 品種である。そのほかの品種は、日本において突然変異や交雑により作り出されたものである。

選評基準について、まず指摘できることは、これらのすべての品種に共通する基準はない。選別基準と同様に、品種ごとにその基準は存在する。以上の品種から蘭鑄・土佐金・地金を取り上げて、それぞれの選評基準を見てみよう。金魚を観賞する立場は、①一般家庭で飼育する者、②熱心な愛好家として自家で採卵・孵化・育成して優秀な金魚を飼育する者、③販売・出荷を目的として大量に金魚を飼育生産する者に大別される。蘭鑄・土佐金・地金は、主に、②の熱心な愛好家たちによって飼育されている金魚であり、その人々の観賞において選評基準が作り出されてきた。

## 1 蘭鑄

蘭鑄の飼育は江戸時代中期には行われていた。江戸時代には、卵虫、丸子とも書かれた。江戸時代の絵画に描かれている金魚には和金と蘭鑄が多い。蘭鑄の特徴は、背鰭を欠き、背の部分ゆるやかな曲線をなしていることである。頭部の皮膚が肥厚して肉瘤になっていることも特徴であるが、その特徴が固定したのは 1860 年代後半である。蘭鑄の品評会は、1831 年(天保 2)以降、大阪では毎年開かれていた。1871 年には、肉瘤のある蘭鑄の品種固定に成功した石川亀吉を中心に東京で品評会が開かれた。1884 年に東京に「観魚会」が結成され、翌年にはその第 1 回品評会が開催された。その後、各地に愛好家の会が発足した。1941 年には「全日本ランチュウ連盟」が、東京・京都・大阪の愛好家を中心になって結成されたが、1943 年には解散した。1956 年に「日本らんちゅう協会」が結成され全国的に発展している〔松井 1963: 20-29, 1972: 24-25, 鈴木 1997: 99-104〕。

蘭鑄の選評基準について「日本らんちゅう協会規約」に定められた基準をもとにみてみよう。品評会の選評は、当歳魚(1 歳)・二歳魚・親魚(3 歳以上)の年齢別に行われる。等級が相撲の番付によって表される。優等賞は計 5 尾選ばれ、東・西大関、立行司、取締(2 尾)と表される。1 等賞は計 6 尾選ばれ、東・西関脇、東・西小結、勸進元と表される。2 等賞は計 5 尾選ばれ、行司(3 尾)・脇行司(2 尾)と表される。3 等賞は親魚と 2 歳魚ではそれぞれ計 50 尾、当歳魚は計 60 尾選ばれ、東・西幕の内の前頭と表される。さらに、同一魚で全国大会に 3 年連続東西大関を獲得した金魚は横綱として表彰される(大会規定第 7 条・表彰規定)。

大きさについて、「審査に当りては、魚の大小を考慮に入れてはならない」(審査規定第 3 条)とされ、色については、「鱗は乱れず一線に並び魚体に比例してなるべく小さいものを上とし、色艶は赤、更紗に拘わらず、赤の場合は濃赤、黄金色でしかも健康色を放っているものを上とする。白、更紗もこれに準ずる」(審査規定第 1 条の 3)とされている。

頭・背・腹・尾・鰭の部位ごとに基準が細かく決められている（審査規定第2条）。以下、それぞれの部位の良品としての基準を、審査規定第2条と石川・大郷 [1985: 12-16] をもとにまとめる（図1）。

頭 眼幅と眼先が長く、目先の厚みのあるもの。肉瘤の形状には多くの種類がある。頭頂部が著しく発達しているものを「兜金」といい、鰓蓋部の発達しているものを「髪張」といい、頭頂部・眼下部・鰓蓋部の均衡がとれているものを「龍頭」という。

背 背幅が広くして丸みをおびている。背のラインが頭の付け根より弓形に上り、中央より下りて、無キズのもの。背のラインが一文字に平らになっているものや、凹凸あるいは曲りのあるものは不良。

腹 左右両方が同様に張り出したもの。片方が多く張り出したものを「片孕」といい、不良。

尾筒 上方から見た場合、背幅に比例してより太くたくましく、尾付けのところで丸みをもったもの。側面から見た場合、背の弓形を延長し、長短なく尾付けまで下りているもの。尾筒のところで急に下りているものや凹凸あるものは不良。

尾 上方から見た場合、尾付けの左右が対称であり、魚の泳ぐ時につぶれないようしっかりしている。尾の立上りは背より上がってはならない。尾心の立ったものや垂れたものは不良。尾は、泳ぐ時に閉じ、止まった時に直ちに45度以上開く。尾の形は三ツ尾・桜尾・四ツ尾（図2）のいずれでもよい。

鰭 各鰭とも均等な大きさ及び動きを必要とする。掛鰭（尻鰭）は一本尾・二本尾のいずれでもよい。掛鰭は、上方から見た場合、尾の下陰にあって、尾の外に現れていない。

そのほか、頭・背・腹・尾・鰭の部位の欠点が細緻に定められている。たとえば、尾心に余分なものが付いている（つかみ）、尾心が筒に突き込んでいる（突っ込み）、尾肩なくしてすぼけた尾（すぼけ）、尾付けが対称的でない（付け違い）、尾肩の片方が落ちているもの（片落ち）、尾肩の片方が強く張ったもの（片張り）、尾心が右か左に倒しているもの（尾心倒れ）など、その欠点が55項目にわたってあげられている [石川・大郷 1985: 94-96]。

蘭鑄の全体的な体形が「背下り」という言葉で提示されている。石川・大郷 [1985: 75] によれば、背下りの理想形が、図3のように示されている。眼と尾付けの側面の中心に直線を引き、さらに、この上下に平行線を引いて、図の上下の長さが等しく、図のAの部分の形をしているものが「理想の背下り」である。中心線より尾付けの中心が下にあるものを「深い背下り」、上にあるものを「甘い背下り」という。

蘭鑄の選評基準は、序列を表す段階的な基準ではなく、理想的な蘭鑄像の提示といえることができる。理想的な各部位の形態や体形が細緻に定められている。一定の理想形にいかにか嵌合しているかを選評することが蘭鑄の観賞である。石川・本郷 [1985: 153] には、沢田久治（日本らんちゅう協会西部本部長・当時）が蘭鑄の優魚作出の秘訣として、「私は金魚をつくる前に頭で金魚をつくっています。頭で必ずことしは金魚はこうあるべきだという夢を空想——連想というか、頭で金魚をつくっています。それを基本としてやっているだけのことです」と述べている。「こうあるべきだという夢」とは蘭鑄の理想形のことである。優魚とは理想形に嵌合した金魚のことである。理想形に嵌合させることに飼育者の並々ならぬ意欲と努力が向けられている。蘭鑄の観賞の志向は、一定

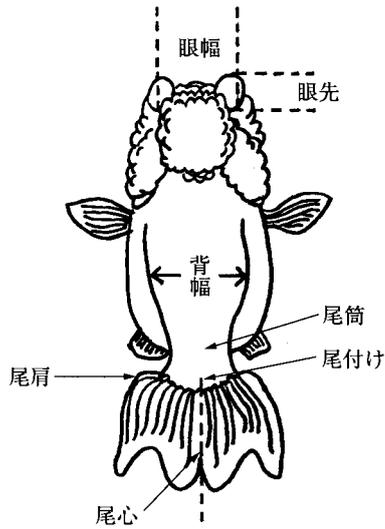
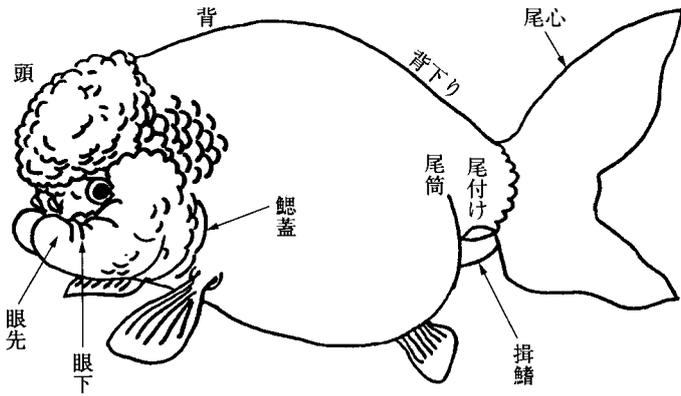


図1 蘭鑄の各部位の名称 (石川・大郷 [1985: 93] より作成)

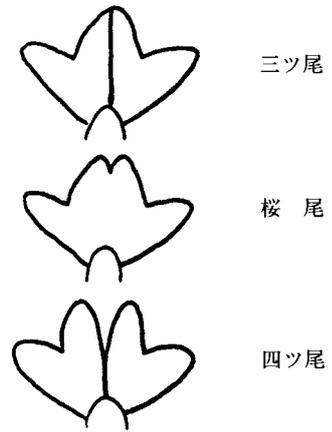


図2 尾鱗の形 (松井 [1963: 141] より作成)

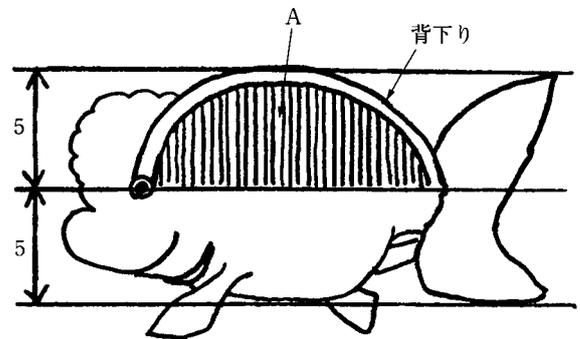


図3 尾鱗の理想型 (石川・大郷 [1985: 75] より作成)

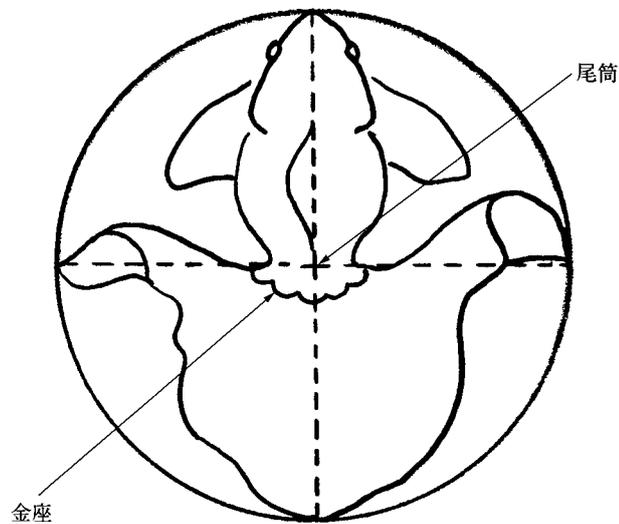


図4 土佐金の理想型 (矢野 [1976: 26] より作成)

の理想形への深化ということができる。

蘭鑄の観賞は1品種の中に完結している。品種を単位として愛好家の集団が組織され、その中で選評の基準が作られ、観賞が行われている。蘭鑄の愛好家の組織には「宗家」が存在する。1941年に結成された「全日本らんちゅう連盟」によって開催された第1回品評会において、2代目石川亀吉が宗家に推された〔松井 1972:101〕。その先代は1860年代後半、現在の形である肉瘤をもつ蘭鑄の品種固定に成功した人物である〔松井 1963:21〕。さらに、蘭鑄の観賞には、「品位」とか「味」といった選評基準が存在する。「日本らんちゅう協会規約」の「審査規定」第1条の4は「魚の品位が豊かであること」となっている。また、優魚の条件として「味」があげられ、次のように述べられている。

味と言う奴は図解が出来ないから困るし、言葉で言っても、やはり抽象的な言葉で、説明はしにくいよ。つまり魚の特徴を言う時もあり品位を言うこともあるからね。結局いつ見ても見飽きのしない長所、ランチュウのような不自然な型でいて、何処か自然な所がある。これを味と言うんだらう。〔石川・大郷 1985:100〕

品位や味の基準は図や言葉では説明できないという。それは、蘭鑄の飼育と観賞に熟達した愛好家の間にのみ通用する基準である。1品種に閉じられた組織が形成され、その内部だけに理解可能な選評基準が存在する。蘭鑄の観賞の志向について、さらに補足していえば、それは1品種に完結した一定の理想形への深化である。

## 2 土佐金

一定の理想形への深化という志向は、土佐金の観賞からもいうことができる。土佐金は、琉金と大阪蘭鑄を交雑したものから淘汰して、さらに尾鰭の突然変異により出現したものである。尾鰭が両側に著しく展開しその外縁の先端が前方に広がり反転しているのが特徴である。19世紀の中頃、高知城下の南与力町に住んでいた下級武士の須賀亀太郎によって品種固定された。高知市を中心に飼育され、1910年代頃から土佐金の品評会が開かれていた。1969年には高知県の天然記念物に指定された。1972年に「土佐金魚保存会」が結成された。1971年には東京で「トサキン保存普及会」が発会した〔松井 1963:64-65, 1972:26-27, 矢野 1976:39-46〕。

矢野城桜〔1976〕は、土佐金の観賞について、「トサキンと円形」と題して、次のように述べている。

トサキンで最も問題となるのは、その体形である。それぞれの人が、おもいおもいに、独自の方法で飼育の難関を突破して行っているであろうが、頭に描く「幻のトサキン」、つまり、眼に見る色や形の上での理想像はどうあるべきか。これは、別図に示すような魚体と尾鰭のバランスが、まず要求されるのではなかろうか。〔矢野 1976:25〕。

蘭鑄と同様に、頭に描かれるあるべき土佐金の理想像が示されている。魚体と尾鰭のバランスが図4のように提示されて、尾筒の付け根に中心を置き、口先までの半径で円を描いた場合、尾鰭の前左右の軸の先端がほぼその円周に接し、尾鰭中軸の先端も同じくほぼその円周に接する。さらに、尾筒に置いた円の中心で口さきに向かう直径と直角に左右の尾鰭の前軸が交わると説明されている。つまり、土佐金の理想形は、尾筒の付け根を中心とする円周で示された十文字形である。

その他、各部位の選評基準は次のようにあげられている。金座(白では銀座となる)が大きくはつきり出るのを良とする。尾鰭の左右の先端が極度の前に出て、尾鰭が金魚の顔に近づくのはエビ尾といい、これは不良である。尾軸が太く短くなっても、小さくて細長くなっても不良。体色は錦、白地に深紅色の美しく散ったものが望ましく、純白は好まれない [矢野 1976 : 25-27]。

土佐金の各部位の選評基準は蘭鑄ほど精緻には作られていない。しかし、理想形の提示において、定形化への抽象度が進んでいる。その理想形が円形に抽象化された定形で提示された。図4の理想形に限りなく嵌合させることが飼育者に要求されている。その観賞の志向は、蘭鑄と同様に、1品種に完結した一定の理想形への深化である。

### 3 地金

地金は、地金魚、しゃち、愛錦、孔雀とも呼ばれた。名古屋市を中心に、愛知県下で飼育される。1958年に愛知県天然記念物に指定された。地金は、寛文・延宝期(1661~80年)に作出され、寛政(1786~1800年)の頃、牧田孫兵衛が金魚の腹に葵の紋を染め描いて藩主に献上し、賞賛されてから飼育が盛んになったという伝承がある。1810年(文化7)の五柳軒蔵六庵による「金魚飼様」という書には「地金」「地金魚」の名が載っている。1860年代後半には、名古屋市を中心に「ならべ会」という品評会が開催された。1920年代後半には、「六鱗保存会」が設立され、そこで観賞基準の制定や品評会が行われてきている [松井 1963 : 30-33, 1972 : 25-26, 95-97]。

地金は、尾鰭と体色に特徴がある。尾鰭の場合、後方から見ると、尾の四片が図5のように十文字型に開き、その中心部は小盤状をして、そこに小鱗がある。四片の尾鰭を振り動かして遊泳して、静止したときに尾がぱっと開く姿が観賞のポイントとなる。尾の四片のうち、上側の左右二片の分かれ目が、やや丸みのある切れ目になっているものを「笹破型」、将棋の駒の頭のようにとがっているものを「将棋頭型」という [松井 1963 : 32]。

地金の最も大きな特徴は体色である。各鰭と口辺と鰓蓋が赤色で、胴体が白色であるものが理想形とされている。この理想形は六鱗と呼ばれる。しかし、六鱗の体色が自然の状態では表れることははなはだまれであるという。そこで、理想形の六鱗にするために、人工的な色付けが行われてきた。孵化後2,3カ月して体色に変化してくる頃に、表皮に氷酢酸・酒石酸・サルチル酸・希塩酸などを塗って皮膚の色素を破壊して変色させるか、鱗を少しずつはぎ取って変色させることが行われた。かつて、シュウカイドウ (*Begonia grandis Drya*) の汁を塗ったり、梅干しの果肉と焼き明礬を練り合わせたものを塗ったりした [松井 1963 : 33]。

愛知県海部郡弥富町で1960年から1975年まで金魚飼育を行っていた人からの聞き取りでは、地金の鱗を竹のへらで1枚ずつはぎ取ったという。鱗をはぎ取った後は白くなった。この方法で金魚の体に模様を描いたことも

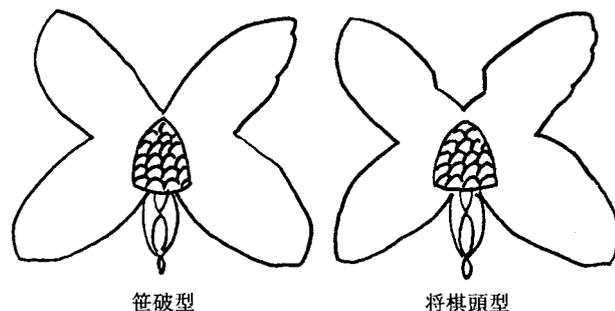


図5 後方から見た地金の尾 (牧野・松井 [1970 : 115] より作成)

あった。1度に鱗をはぎ取ってしまうと弱ってしまうので、少しずつ鱗をはがしていった。鱗をはぎ取った後、殺菌剤を薄めた水に地金を入れた。10匹のうち3匹くらいしか成功しなかったという。

現在、同県豊橋市東幸町における地金の飼育を見ると、飼育者たちは、地金のクチビル（口の周辺）、マエビレ、ハラビレ、セビレ、カジビレ、オ（尾ひれ）の6カ所だけを赤く残そうとする。そのため、7月下旬、稚魚の体色がついてくる時期に、彼らが「人工調色」と呼ぶことが行われる。赤く出てしまった余計な部分の鱗を竹やプラスチックのへらではがすのである。明治時代の頃には、梅酢や塩を鱗にすり込んでいたという（筆者調査）。

地金の体色が、理想形に嵌合させるために人工的に改変される。金魚飼育とは、交雑や突然変異によって出現したものを品種として固定して、それを孵化飼育することであり、こうした成魚への後天的な加工は飼育技術とは別個にすべきかもしれない。しかし、地金の配色加工には、あくまでも理想形へ嵌合させようとする強い飼育態度が見出される。

蘭鑄・土佐金・地金から日本金魚の選評基準をまとめてみよう。第1に、1品種の中に完結した選評基準であり、金魚の品種全体を貫く選評基準はない。1品種に閉じられた集団が組織され、その中で選評基準が作られている。第2に、その基準の内容は、定形化された理想像の提示である。蘭鑄の理想形では部位の形態や体形が精緻に規定されていた。土佐金は円形に抽象化された理想形が示されていた。地金でも尾鱗の定形が理想形として提示された。地金の場合、特に特徴的であったのは、自然にはほとんど存在しない体色が理想とされ、その理想形への嵌合が人工的に行われた。

以上から、日本金魚の選評基準は、1品種に完結した理想形として提示されており、その基準への嵌合という飼育形態がみられた。そして、その観賞の志向は、一定の理想形への深化とまとめられる。

## ②……………『金魚養玩草』にみる選評基準

18世紀の中頃に著された金魚飼育書『金魚養玩草』を用いて、現代における日本金魚の観賞の志向として抽出した1品種の定形への深化について検証してみよう。安達善之によって著された『金魚養玩草』は1748年（寛延元）に刊行され、その後、広く普及し、写本・抄録本・異本も多く出された。『金魚養玩草』は日本の金魚飼育書の嚆矢であり、著者の長年の金魚飼育・繁殖の経験にもとづいて書かれた本格的・実用的な解説書である〔伊藤 1997〕。

そこには、「金魚」と「らんちう」が取りあげられている。江戸時代初期から中期、金魚とは和金のことであった。和金はたんに「きんぎょ」と呼ばれていた。『金魚養玩草』に描かれている金魚（図6）は「典型的なしりびれ二枚の『ワキン』」である〔鈴木 1997: 95, 99〕。以下、『金魚養玩草』で記されている「金魚」は和金として述べていく。

『金魚養玩草』では、和金のよしあしの見分け方が書かれており、そこには、和金の選評基準が尾鱗の形と鱗のつき方から次のようにまとめられる。

極上々 四つ尾・丸金、かじ尾・丸金

上々 四つ尾・丸金、三つ尾・丸金、三つ尾・長金、かじ尾・長金、房尾

- 上 四つ尾・長金, 矢尾
- 中 三つ尾・長金
- 下 ふな尾

四つ尾・三つ尾の形は図2を参照されたい。かじ尾とは、よく開いた四つ尾の中央から別の尾が出ているものである。丸金とは、尾の付け根から約4～5分のところに金色の鱗がついていることである。四つ尾で丸金のものやかじ尾で丸金のものが極上々品である。

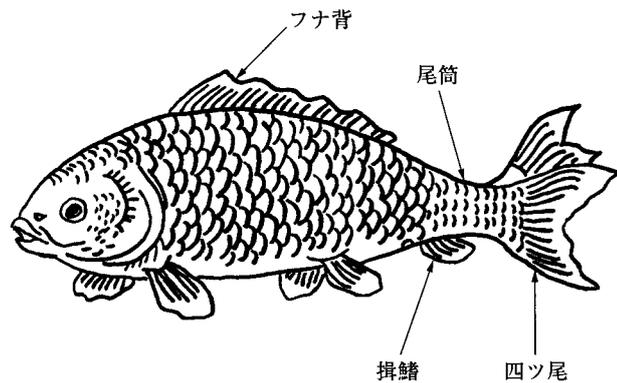


図6 「金魚養玩草」の和金(安達[1997:425]より作成)

長金とは、尾の付け根から背中の方へ

1寸4～5分のところまで金色の鱗がついていることである。房尾とは、尾が長く、泳ぐと房のように見える尾のことである。矢尾とは、尾の中央がとがって矢の形に似ている尾のことである。そして、下魚は「じゃみ魚」(くず物, 不良品の意)とされた[安達 1997:424-428, 434]。

蘭鑄では、「首ぎわから尾まで節が立たず、すなおな形のものが上品とされている[安達 1997:444]。これは「背下り」のことである(図3)。『金魚養玩草』では蘭鑄の記述はわずかである、そのほとんどが和金の飼育にあてられている。

『金魚養玩草』でも、和金と蘭鑄を統一して選評基準をとらえることはなされていない。それぞれの品種の中で理想形が提示された。和金の場合、尾鱗の形と鱗のつき方の理想形が提示され、それに嵌合しないものは「じゃみ魚」とされた。『金魚養玩草』には良品の金魚の表現として「くせなき」という記述があり、「くせ」の注釈として、「金魚は飼育・観賞上、姿形・色・動きなどの基本型があり、ここではそのバランスが、具合が悪くなることをいう」とある[安達 1997:434]。「くせ」のない金魚を飼育することとは、理想形に嵌合させることである。

しかし、『金魚養玩草』では選評基準には嵌合しない金魚をも評価しようとする態度が見られる。理想形としてあげられた尾鱗のほかに、えび尾・両ばね・片ばね・大開・中開・前揃・指し尾・なかくぼ・ぶどう葉・獅子尾・一文字尾・十文字尾が記されている。さらに、「異魚」ではあるが「面白き」ものとして、次のような5種類の尾鱗の形が記されている[安達 1997:428-429]。

揚羽蝶 色はとりわけ濃く、朱を塗ったようで、胸びれが特に大きく、蝶に似ている

箱尾 尾を後方から見ると門の形をしている

ほととぎす 三つ尾で、中の尾が特に長く、ホトトギスの尾に似ている

八丈 全身に赤・白・黒の三色の縞模様がある

のし尾 ふな尾で先がそろって、尾が二枚重なり、「のし」に似ている

「異魚」とは選評基準に嵌合しない金魚のことである。これを「面白き」と取りあげる態度は、現代の日本金魚ではみられない。また、『金魚養玩草』で理想形の他の例としてあげられた尾の形の中で、十文字尾は地金の原形と推定されている[松井 1963:33]。選評基準に嵌合しない「異魚」を取りあげる態度は、新品種の作出に結びついてくる。現代の日本金魚の選評基準では1品種の枠を越えて新品種を評価することは見られない。『金魚養玩草』には、現代における日本金魚と異な

る観賞の志向もとらえられる。

### ③……………中国金魚の選評基準

中国金魚の品種は、体形、鱗、尾、頭、眼球、鰓、鼻、鱗の形状の組み合わせにより分類されている。その分類と命名法は別のところ [野地 2002] ですすでに論じたが、金魚の品種分類と命名法は選評基準にも密接に関係しているので、本稿でも簡略にふれておく。図7に見るように、中国金魚は、草族・文族・蛋族に大別され、その下位は頭や眼の形状によって分類されている。たとえば、文族の龍眼の場合、体型が丸く、背鱗があり、出眼の金魚がここに属する。さらに、その下位において、単に眼球が出ているもの（睛眼型）と眼球が上を向いているもの（朝天眼型）に分類される。そして、龍眼型において、体色が紅色のものが紅龍睛、体色が白色のものが白龍睛、体色が白で眼が紅色のものは朱眼龍睛、体色が黒で尾鱗が蝶のように跳ね上がっている形をしたものが墨龍睛蝶尾という品種になる。また、文族・龍眼で、絨球をもって、体色が紅色をしたものが紅龍球、体色が黒色で絨球が4つあるものが墨龍四球という品種になる。文族・龍眼には80品種が上げられ、金魚全体では総数280品種が上げられている [王 1994: 18-29]。金魚の形態により分類の系が構成され、さらに形態や色の組み合わせにより命名がなされている。中国金魚には、品種全体を貫く一定の命名法がある。それに対して、日本では、品種の分類は系をなしておらず、品種全体を貫く一定の命名法もない。

中国金魚の選評基準について、伍 [1983: 59-62] をもとにまとめてみよう。そこでは、1993年、江蘇省無錫における第1回中国金魚展覧会で採用された「中国名貴金魚評選基準」があげられている。この選評基準は、1985年、上海市金魚協会主催の第1回中国名貴金魚展覧会以降、金魚飼育の専門家や研究者、養魚場を持つ経験豊富な専門家、多くの金魚愛好家の意見をもとにして作成されたものである。

金魚の選評基準は、①形態35点、②色つや20点、③品種の特徴40点、④説明5点の総計100点で表される。まず、①形態の選評基準は、表1のように、年齢、大きさ、重さ、鱗の状態、発育の状態の5項目（各7点）から基準が作られて、それぞれ5段階に分けられている。表1では、各項目の下にいくほど点数が上がるようにまとめられている。たとえば、年齢10歳以上、大きさ28~30センチメートル、重さ451~500グラム、鱗の状態として「諸鱗がそろっている。尾が4つに開いており、のびのびとして折れ曲がりがない」もの、発育の状態として「壮健、活発、背が広く体が丸く、太っている」ものが最高点（35点）となる。

②の色つやは、4段階に分けられている。表2では、項目の下にいくほど点数が上がるようにまとめられている。「鮮やかで光沢があり、紅色はより紅く、白は純白、雑斑がなく調和している。五花は藍色が多く、花紋が細かい」ものが最高点（20点）となる。

以上の形態や色つやの基準は、品種別に作られていない。それらはすべての品種に共通する基準となっている。

③の品種の特徴に関する基準が表3である。各品種ごとに3段階に分けられている。表3では、左側にいくほど点数が高くなる購うにまとめられている。表3では、品種とされた項目に、珍珠

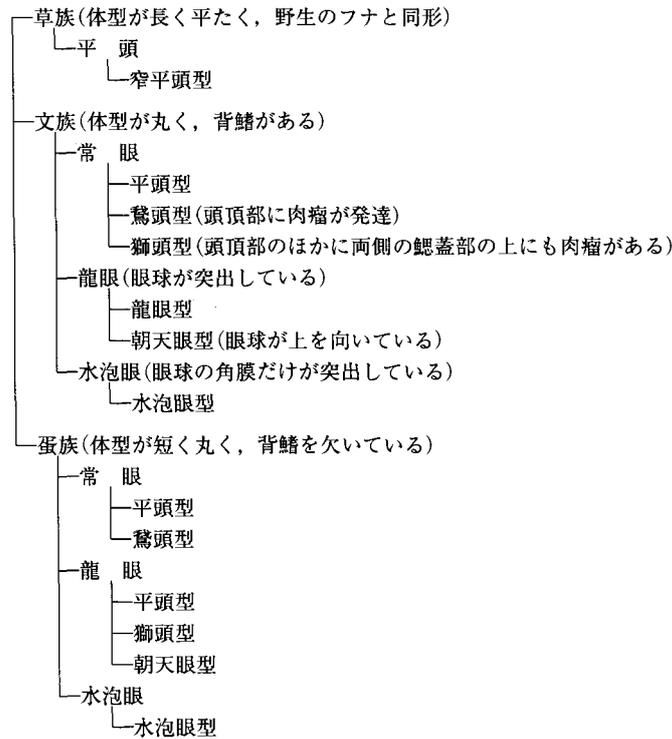


図7 中国金魚の品種分類 (王 [1994: 18-29] より作成)

表1 中国金魚の選評基準 (形態)

得点	項目	年齢	身長(cm)	体重(g)	鰭の形	発育
形態 35 点	各1~3点	1~2	14~17	50~150	鰭が不完全 尾鰭が四つに開いていない 折れ曲がり, 裂けている	病体, 畸形, 変態魚
	各2~4点	3~5	18~21	151~250	臀鰭を欠く 尾鰭が四つに開いているが, やや 巻き折れている	瘦弱, 身体が不均衡
	各3~5点	6~8	22~24	251~350	諸鰭がそろっている 尾が四つに開いているが, のびの びしていない	壮健, 一般的にふとっている
	各4~5点	9~10	25~27	351~450	諸鰭がそろっている 尾が四つに開いており, のびのび として折れ曲がりがない	壮健, よくふとっている
	各5~7点	10以上	28~30	451~500	諸鰭がそろっている 尾が四つに開いており, のびのび として折れ曲がりがない	壮健, 活発, 背が広く体が丸く, ふとっている

注 伍 [1983: 60] より

表2 中国金魚の選評基準（色つや）

得点	基準	内 容
色とつや 20 点	10～12点	病体，色彩が暗淡，光沢がない
	13～15点	色が淡く鮮やかでない 五花(品種)では色彩の不調和，黒色過多，藍色なし
	16～18点	色とつやが鮮やか，調和を欠く 雑斑がある 五花では藍色が少なく花紋が大きい
	19～20点	色とつやが鮮やかで光沢がある 紅はより紅く，色は純白，雑斑がなく調和している 五花は藍色多く，花紋が細かい

注 伍 [1983:60] より

表3 中国金魚の選評基準（品種の特徴）

項目	得点	35～40 点	25～35 点	15～25 点
特 徴 40 点	珍珠鱗*	珠鱗が大きく整っている 背や尾に欠損がなく，雑鱗がない 頭がとがっていて小さい 腹が丸くふくれている 大尾がのびのびしている	珠鱗が大きい，欠けている 雑鱗がある 頭が比較的とがっている 腹がふくれている 大尾が小尾をなす	珠鱗が小さい 雑鱗がある 鱗の欠損が多い 頭がとがっていない 腹がややふくれているが丸くない 尾が小さい
	水泡*	泡が丸くやわらか，透明，特大 左右対称で大きさが同じ 背が丸くなめらか 体が短い 蛋形*	泡が丸くやわらか，透明，比較的大き い 左右対称 背が平らでなめらか 体が短い	泡が丸くやわらかくない 大きさは一般的だが，左右の大きさが 少し異なっている 背が平滑でない
	獅子頭*	頭，鰓，下顎部の肉瘤が草苺状をなし， 大きく発達して「王」紋を呈す 眼と口が肉瘤の中に入り込んでいる 遊泳・静止時に魚体が等しく安定して いる 寿星*の頭形，背は弓形で光なめらか	頭，鰓，肉瘤が塊をなし，大きく発達 している 眼と口が肉瘤の中にはっきりと入って いない 遊泳時安定している 寿星の頭形，背は平らでなめらか	頭部の肉瘤が塊をなすが，発達を欠い ている 鰓部の肉瘤は小さい 眼と口が肉瘤の中にはっきりと入って いない 静止時安定していない 寿星の頭形，背が平滑でない
	鵞頭紅	全身白く，つやがある 頭頂部の肉塊が鮮やかな紅で，正方形 で，草苺状を呈す 鰓蓋と下顎の肉塊が等しく発達してい る 眼の回りは紅色，眼と口が肉瘤の中 に入りこんでいる 遊泳・静止時魚体が安定している	全身が白く，頭頂部の肉瘤が鮮やかな 紅で，正方形で，塊をなす 鰓蓋と下顎の肉瘤が発達している 遊泳時に魚体が安定している	全身が白く，頭頂部の肉瘤が薄い紅色 で，塊をなすが，正方形に発達してい ない 鰓蓋と下顎の肉瘤が小さい 遊泳・静止時に魚体が安定していない
	龍 睛	両眼が碁石型をなし外に出ている，左 右の大きさが等しい 頭が平らで広く，体が短くたくましい	両眼がリング型をなし，外に出て，左 右の大きさが等しい 頭が平らで広く，体が比較的短く，た くましい	両眼が電球型か牛角型をなし，外に出 て，左右の大きさが等しい 頭は広くない 体形は細長い
	蝶 尾	尾が大きく平らでのびのびしている 蝶型がはっきりしている 遊泳・静止時に魚体が等しく安定して いる その他の特徴は龍睛と同じ	尾が大きく平らでのびのびしている 蝶型がはっきりしている 遊泳時に魚体が安定している その他の特徴は龍睛と同じ	尾の大きさは中で，平らでのびのびし ている 蝶型がはっきりしていない 魚体は安定していない その他の特徴は龍睛と同じ

絨球*	球体が大きく、丸く整っており、致密で、大きさが等しい 体が短くたくましい 背が光りなめらか	球体が大きいがまばら、大きさが等しい 体が比較的短くたくましい 背は光りなめらか	球体は一般的な大きさだが、大小がある 体は短くなく、たくましくもない 背は平滑がない
朝天龍	両眼が大きく平らでまっすぐ上を向いて、左右対称に外に出ている 背は丸くなめらか 体は短くたくましい	両眼は大きい平らではなく、上を向いており、外に出ている 背は平らでなめらか 体は比較的短い	両眼は大きくなく、前か左右斜めに出ている 背は平滑でない 体は細長い
丹鳳	鱗はやわらかく雑鱗がない 体が短く丸い、尾は大きく長い 眼が小さく口がとがっている 背が丸くなめらか	鱗はやわらかいが、正常な硬鱗が少しある 尾は大きく長い 眼や口は一般的な大きさ 背は平らでなめらか	正常な硬鱗が多い 体が短くない 尾は一般的な長さ、口はとがってなく小さくない 背は平滑でない
琉金	背の弓型がはっきりしている 尾は大きく長くのびのびしている 頭はとがっていて小さい 腹は丸くふくらんでいる 魚体の高さがあり短かい 体形は三角形に近い	背は弓型、尾は大きく長くのびのびしている 頭はとがっていて小さい 腹は一般的にふくらんでいる 体の高さはよい	背の弓型がはっきりしていない 尾は大きい 頭は小さくない 腹はふくらんでいない 体の高さは一般的で、細長い

注 伍 [1983: 61] より

- \* 珠鱗：半球上の鱗
- \* 水泡：眼球の角膜だけが突出している
- \* 蛋形：体型が短く丸く、背鰭を欠いている
- \* 獅子頭：頭部に肉瘤がある
- \* 寿星：長頭
- \* 絨球：鼻孔褶が肥大して球のようになっている

鱗・水泡・獅子頭・鵞頭紅・龍・蝶尾・絨球・朝天眼・丹鳳・琉金の10例があげられている。これらのうち、鵞頭紅・丹鳳・琉金は品種名であるが、それらのほかは必ずしも品種名ではない。鵞頭紅は、蛋族・常眼の鵞頭型に属して、体色が白で頭部の肉瘤が紅色の品種である。丹鳳には体色の違いによりさまざまな品種があり、青丹鳳・藍丹鳳・紅丹鳳・紫丹鳳・五花丹鳳という品種に細分されている。また、鼻孔褶が肥大した絨球という部位をもった丹鳳もあり、それは紅丹球・青丹球などという品種に分けられている。琉金は日本金魚の品種名であり、ここにあげられている理由は不明である。琉金は、中国金魚ではおおまかにいって文魚に相当する。文魚とは体型が丸く背鰭があり、常眼・平頭の金魚のことである。文魚は体色により、紅文・白文・藍文などという品種に分けられている。丹鳳・琉金(文魚)という品種は1品種を指す名称ではなく、そこには多くの品種が含まれている。

鵞頭紅・丹鳳・琉金のほかに、表3で品種の項目にあげられているのは、品種名というより品種の特徴を示す部位である。珍珠鱗とは半球状の鱗のこと、水泡とは眼球の角膜だけが突出していること、獅子頭とは頭部の肉瘤のこと、龍睛とは出眼のこと、蝶尾とは尾が蝶のように跳ね上がっていること、絨球とは鼻孔褶が肥大して球のようになっていること、朝天眼とは眼球が上を向いていることである [松井 1953]。

先にふれたように、中国金魚は部位の特徴により品種の命名がされているので、部位の名称はすなわち品種名に結びついてくる。部位名は品種を表すともいえる。そのため、部位名か品種名かの区別はあいまいである。しかし、表3にあげられた部位の組み合わせにより、さまざまな品種が表される。たとえば、珍珠鱗と龍睛の部位をもった金魚には紅龍珠や墨龍珠などがあり、同様に、龍

睛・蝶尾の部位をもった金魚には墨龍睛蝶尾や紅龍睛蝶尾など、龍睛・獅子頭・絨球の部位をもった金魚には紅凸眼虎頭球がある。表3には、一定の部位をもった多くの品種に共通する特徴が記されているのである。ここにあげられた部位名は1品種に対応するものではない。

表3の内容を見てみよう。表3の「驚頭紅」の場合、最高点は、「全身が白く、つやがある。頭頂部の肉瘤が鮮やかな紅色の正方形で、草莓状を呈する。鰓蓋と下顎の肉瘤が等しく発達している。眼の回りは紅色、眼と口が肉瘤の中に入り込んでいる。遊泳・静止時に魚体が安定している」となっている。「龍睛」の場合、最高点は、「両眼が碁石型をなし外に出ており、左右の大きさが等しい。頭が平らで広く、体が短くたくましい」となっている。「龍睛」の項目は、すでに指摘したように、1品種の特徴ではなく、「龍睛」(出眼)という形状をもった品種に共通する基準である。表3の基準は1品種に対応したものではない。その内容では、実際に表れてくる特徴が具体的に示され、等級分けがなされている。定形の基準の抽象化の度合いは弱く、その基準の提示は実体的である。そこに見られる選評基準の提示の仕方は、実体に即した等級分類であるといえる。日本金魚の選評基準は、ある程度抽象化された理想形として提示されていたが、中国金魚のそれは、実体的に現れる体形・体色・部位の具体的な等級分類である。

④では、新品種の作出が評価されている。④の説明とは、出品した金魚の品種、飼育状況、雑交過程を書面で紹介することであり、これにより5点が付加される。さらに、新品種の子孫には、奨励点として10点が加えられる。新品種の認定には、親魚2匹がともに同じ性質をそなえ、新しい特徴や遺伝的要素が3代にわたって安定的に見られることが必要である。親魚2匹のサンプルか2代以上の親魚のサンプルが出品されることが条件付けられている。

中国金魚の選評基準の特徴をまとめてみよう。第1に、その基準は金魚の全品種に拡大して適用できるように作成されている。日本のように1品種の中で完結した基準ではない。第2に、品種ごとの選評基準も提示されていたが、実際には、1品種の基準ではなく、一定の部位を共通してもつ多品種を対象とする基準であった。中国金魚は、部位の組み合わせにより品種が分類・命名されていた。そのため、部位によって品種を選評することは、多様な品種に拡大して適用できる<sup>(6)</sup>。第3に、新品種の作出が評価されたように、選評基準の範囲は、既存の品種の枠外に及んでいた。既存の品種にはみられない変形を評価しようという志向がある。新たに作出された品種を評価することは、現代の日本金魚の選評基準には見られない。

以上から、中国金魚の選評基準は多品種を包括した実体に即した等級分類として提示されており、定形の基準外の品種作出という飼育形態がみられた。そして、その観賞の志向は、多様性への拡大とまとめられる。

## おわりに——動植物観賞の比較民俗学——

日本金魚と中国金魚の選評基準とその観賞は表4のように対比される。日本金魚の選評基準は、1品種に完結した理想形の提示であり、その基準への嵌合という飼育形態がみられた。そして、その観賞の志向は、一定の理想形(定形)への深化である。中国金魚の選評基準は多品種を包括した実体に即した等級分類の提示であり、その基準外の品種作出という飼育形態がみられた。そして、

表4 日本金魚と中国金魚の対比

	選評基準	飼育形態	観賞の志向
日本金魚	1品種に完結した抽象化された理想形	基準への嵌合	定形への深化
中国金魚	多品種を包括した実体に即した等級分類	基準外の創出	多様性への拡大

その観賞の志向は、多様性への拡大である。

筆者は、別の論文で、金魚の品種分類と生産者の飼育技術をととして、日本では、定形化された品種の中への深化を志向する技術であり、中国では、変形化させてヴァリエティーが増やされた品種への拡大を志向する技術であることを指摘した [野地 2002]。飼育技術からとらえられた日本と中国における志向の対比は、選評基準からみた金魚の観賞でも検証することができた。金魚観賞において、日本は定形への深化であり、中国は多様性への拡大である。

中国金魚では、全品種にわたる選評基準というだけでなく、既存の品種の枠さえも越えて、新品種の作出が評価された。そこには、既存の金魚を変形させ、改造しようとする意欲がとらえられる。日本金魚では、1品種を越えて作出された新品種を評価することは見られない。日本と中国における自然の改造に対する異なる志向性は金魚飼育だけではなく、家畜飼育や花卉・草木や盆景・盆栽の栽培などでも指摘することができる。

金魚の観賞には伝承文化を背景としたルールがある。それが本稿でとらえた選評基準である。金魚飼育とは選評基準に合致した金魚を作り出す技術のことであり、選評基準とは金魚の飼育技術と密接に関係している知識体系のことである。金魚の飼育をはじめ、花卉・草木や盆景・盆栽の栽培などは〈改造された自然〉を対象とする技術であるとともに、〈改造された自然〉の観賞でもある。鈴木克美 [1989] は錦鯉や金魚の観賞を「魚観賞の文化」ととらえたが、観賞の対象となる自然は魚類だけにとどまらず、錦鯉や金魚は動植物観賞の文化として位置づけられる。〈改造された自然〉を観賞する文化において、日本は定形へ深化し、中国は変形に拡大すると予想される。〈改造された自然〉を対象とする技術における志向の差は中国と日本における自然観の差を表しており、日本の自然観は定形への内包化であり、中国の自然観は変形への外延化であると指摘した [野地 2002]。この自然観の対比は〈改造された自然〉の観賞における志向の差からも導かれるものである。

#### 註

(1)——キンギョは、硬骨魚綱コイ目コイ科フナ属のアジブナ (*Carassius auratus auratus*) から人工的に作出された魚である [牧野・松井 1970, 鈴木 1997]。突然変異や交雑により、さまざまなキンギョの品種が出現した。本稿では、キンギョやその品種の表記に当たって、日本と中国との比較を意図していることにより、また、中国では品種の表記自体がその性質を表していることにより漢字表記とする。日本の品種の漢字表記は松井 [1962] と鈴木 [1997] によった。

(2)——これらの中には、すでに絶滅したものがある。1958年以降、中国から新たに輸入されたものもある。

金魚産地の愛知県弥富町の弥富金魚漁業協同組合作成の2000年度版パンフレットには、新品種などが加えられ、34品種があげられている。

(3)——江戸時代中期以降、地金のほかに、土佐金・津軽錦・日本花房・和唐内・ナンキン (漢字表記されていない)・大阪蘭鑄という品種が作出され、現代に継承されている。琉金や和蘭獅子頭は江戸時代末に輸入され、出目金は明治時代以降に輸入された [松井 1935: 319-320, 1972: 22-28, 鈴木 1997: 95-115]。

(4)——表3は日本金魚の選評基準を参考にしていても考えられる。

- (5)——品種の例は、王(1994:18-29)による。 てまとめることができる。しかし、それらの品種を包括  
(6)——日本金魚の場合、たとえば、蘭鑄・東錦・秋 して獅子頭の形で評価することはない。  
錦・和蘭獅子頭は頭部に肉瘤をもった獅子頭の系統とし

#### 参考文献

- 安達喜之 1997 『金魚養玩草』(寛延元年) 佐藤常雄他編『日本農書全集』59:417-445 農山漁村文化協会  
阿部舜吾 1955 『金魚の常識』 慶友社  
海部郡弥富農業補習学校調査部 1932 『弥富金魚』 私家版  
石川亀吉・大郷房次郎 1985 『蘭鑄秘伝』 緑書房  
石田貞雄 1997 「江戸時代における金魚飼育」『日本農書全集月報』25:6-8 農山漁村文化協会  
伊藤康宏 1997 「解題 金魚養玩草」佐藤常雄他編『日本農書全集』59:4・47-463 農山漁村文化協会  
小倉 学 1959 「能登千路の金魚振売商と地藏尊」『日本民俗学会報』7:33-35  
君塚仁彦 1995 「近世園芸文化の発展—その背景と担い手たち—」佐藤常雄他編『日本農書全集』54:5-23 農山漁村文化協会  
国立歴史民俗博物館編 1999 「くらしの植物苑特別企画 伝統の朝顔」国立歴史民俗博物館  
周 達生 1995 『民族動物学—アジアのフィールドから—』 東京大学出版会  
菅 豊 1998 「閉じこめられたヒツジたち—中国江南農耕社会のヒツジ飼育から見た商品経済の発展—」『東洋文化研究所紀要』135:95-139  
1999 「闘コオロギからみた中国漢人都市民の自然観」『北海道大学文学部紀要』47(4):25-92  
2001 「民族博物誌84 キンギョ」『月刊みんぱく』25(8):20-21 国立民族学博物館  
鈴木克美 1989 「魚観賞の文化史—観る楽しみの発見—」矢野憲一監修『魚の日本史 シリーズ自然と人間の日本史』1:56-61 新人物往来社  
1997 「金魚と日本人—江戸の金魚ブームを探る—」 三一書房  
田中国衛 1994 「土佐錦魚の美—蘇る幻の名魚—」 緑書房  
中尾佐助 1986 「花と木の文化史」 岩波書店  
野地恒有 2001 「尾張西部沿岸の漁業」愛知県史民俗部会編『津島・尾張西部愛知県史民俗調査報告書』4:155-170 愛知県  
2002 「比較民俗学の可能性と課題—日本と中国の金魚飼育を題材として—」『日本文化論叢』10:35-56 愛知教育大学日本文化研究室  
牧野信司・松井佳一 1970 『熱帯魚・金魚 標準原色図鑑全集』17 保育社  
松井佳一 1935 「科学と趣味から見た金魚の研究」 弘道閣  
1963 『金魚 カラーボックス』34 保育社  
1987 『金魚文化誌—書誌学的考察—』 鳥海書房  
松井佳一編著 1972 『金魚大鑑』 緑書房  
南方熊楠 1972 「金魚」『南方熊楠全集』4:108-111 平凡社  
柳田国男 1968 「魚の移住」『定本柳田国男集』3:324-326 筑摩書房  
矢野城桜 1976 「土佐錦魚の四季—その飼い方と歴史—」 私家版  
蒋青海編 2001 『観賞魚飼養大全』 江蘇科学技術出版社  
李素梅編著 1995 『实用養金魚大全』 中国農業出版社  
宋憬愚編著 2001a 『金魚養殖技術問答』 金盾出版社  
2001b 『観賞魚養殖—金魚—』 中国農業大学出版社  
王 春元 1994 『中国金魚』 金盾出版社  
王占海等編著 1993 『金魚的飼養與観賞』 上海科学技術出版社  
伍惠生・傅毅遠編著 1983 『中国金魚—鑑賞與養殖大全—』 天津科学技術出版社  
許祺源編著 1999 『金魚飼養百問百答』 江蘇科学技術出版社  
許祺源・蔡仁遠編著 1996 『東方聖魚—中国金魚—』 中国農業出版社  
許祺源・許中雅編著 1996 『中国名貴金魚』 上海科学技術出版社  
薛守紀編著 1998 『花卉與観賞魚』 科学普及出版社  
叶鍵編著 2000 『家養金魚100問』 福建科学技術出版社  
趙承萍等編著 1991 『金魚』 金盾出版社

---

張紹華編著 1992 『観賞魚養殖問答』 中国林業出版社  
張紹華等編著 1993 『金魚錦鯉熱帯魚』 金盾出版社

(愛知教育大学教育学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2001年12月1日受理, 2002年10月4日審査終了)

## **Goldfish Appreciation and Breeding Standards in Japan and China**

NOJI Tsuneari

This paper presents a folklore study that compares cultures in terms of how they appreciate plants and animals, using the breeding standards for goldfish appreciation as my subject. By the term “breeding standards”, they refer to the standards for judging goldfish used in the field of goldfish appreciation. In this paper, I present three varieties of goldfish, Ranchu, Tosakin, and Jikin, as examples of Japanese goldfish today, and I identify trends in breeding standards as well as in goldfish appreciation. Second, by using the “Kingyo Sodate-Kusa”, a manual for breeding goldfish written in the mid-eighteenth century, I examine the breeding standards for goldfish in the Edo period, and third, I compare my findings with the breeding standards for goldfish used in China.

The results show that Japanese breeding standards for goldfish are presented as idealized forms for each variety, and thus goldfish breeding is focused on strict conformity to these ideal standards. Accordingly, the trends in goldfish appreciation are also toward a deeper pursuit of each of the specified ideal forms. While very similar tendencies were found in the “Kingyo Sodate-Kusa”, there was a tendency to go beyond the confines of just one variety and appreciate new varieties, which is different from the trend in goldfish appreciation we see in Japan today. In China, the breeding standards for goldfish are presented as classes and categories that inclusively conform to many actual varieties, and the Chinese approach to goldfish breeding promotes varieties other than those conforming to the fixed standards. Therefore the trend in goldfish appreciation can be seen as moving toward diversification.

Folk culture underlies these goldfish breeding standards. Breeding goldfish is about the technology used to create goldfish that conform to the breeding standards, and the standards are about a system of knowledge that is closely related to this goldfish breeding technology. Not only goldfish breeding, but all types of cultivation—of flowers, plants, and trees as well as bonkei and bonsai—concern the technology that renders the subject a form of “enhanced nature” and leads also to the appreciation of this “enhanced nature”. This can be considered the culture of plant and animal appreciation. I anticipate that the culture of appreciating “enhanced nature” will move toward stricter standardization in Japan, while in China it will

---

---

move toward further diversification. These differences in trends in the appreciation of “enhanced nature” demonstrate a qualitative difference between the Chinese and the Japanese view of nature.